

Fukapon

絵: だれもない

# セレクトタイプ・ チョコレート

さんしまいはみかんせい

三姉妹は未完成 (下)

上巻はサークル「まにふいくみやはか」のウェブサイトにて配布中です。  
<http://www.projectkaigo.org/mnfikmyhk/>

「制服姿は凜としたお姉様なのに、私服は凄く可愛いんですね。びっくりしました。」

もうその話は忘れて欲しいんだけどな。

週が明けて月曜日の放課後、音楽室には私と、今日も訪ねてきてくれた三重野さん。さすがに避けられないだろうと思っていた通り、彼女たちとばったり出会った週末の話になってしまった。

「でも、先輩は何を着ても似合うんですね。やっぱり綺麗な人って違うんだなって思いました。」

彼女は本気で目をキラキラさせている感がある。何となくわかるんだけどさ。プライベートな時間に会ったり、話したりすると、それが大したことでもなくても急に仲良くなれたりする。今の三重野さんと私も、そんなところじゃないかな。

「そんなことないよ。私なんかより、三重野さんの方がずっと素敵だった。落ち着いた着こなしは、誰にでもできるものじゃないと思う。」

「いいえ、そんな。あのときは瑠璃と一緒にだったから、そう見えただけだと思います。私なんてただの高校生ですから。」

首をふるふるさせながら答える三重野さんはとても可愛くて、やっぱり、特別な女の子に見えた。週末の彼女はお嬢様にも見紛う姿で、私より素敵だったというのは率直な感想。だからひよっとしたら彼女も、本気で私のことを綺麗な人だと思っているのかも知れない。まさかとは思いますが、少し嬉しくて、恥ずかしいな。いかんせん、洋服があんなだったから……。

「私もただの高校生のつもりなんだけど、お姉様に見えるぐらい、もう、年なのかなあ？」

「え、あつ、えと、そんなつもりではないんです。その……。」  
照れ隠しにおどけてからかうと、困った彼女が一段と可愛い。とても小さくて可愛らしくて、実年齢よりも幼く見える三重野さん。一方私は、どちらかと言えば実年齢より上に見られることが多い。だから余計に可愛く見えてしまうのかも。

「ふふつ、冗談よ。さて、練習を始めようか。」

「あ、その前に、今週土曜日のこと、いいですか？ 夕方五時に駅前まで待っていてくれませんか。瑠璃が迎えに来てくれることになりました。」

「うん、わかった。高子さんにも伝えておくね。」

ピアノの練習は、一人ですること大切だと思う。だから三重野さんを音楽室に置いて、私は向かいの視聴覚室に来ている。「いなくなっちゃうんですか？」という目で見られた気もするが、おそらくは私の思い過ごしだろう。

視聴覚室にもアップライトがあるので、三重野さんの練習中、私はこつちで練習することにした。ピアノに慣れる程度ならどんなピアノだろうと関係ないのだが、どういうわけが置いてあるコンサートグランドを使わないのはやっぱりもったいない。なので音楽室は三重野さんに使ってもらって、私はこつち。

いつもは時間を気にせず弾いているのだけど、今日は携帯のアラームをセットしておこう。彼女にもいろいろと用事はある

だろうから、そんな長くは引き留められない。一時間程度練習できればいいかな。逆にもしかしたら、一時間はちょっと長く飽きちゃうかも知れないか。何にせよ、しばらくは様子見。一時間の練習、私にとつてはあつと言う間。のはずなんだだけど。

「やつぱり気になつてるのかな。」

アラームが鳴るまでに三度も時計を見て、同じ独り言を口にしてしまう。

結局アラームが鳴る前にそろそろかなと視聴覚室を出て、音楽室に戻った。かすかに響いていたおぼつかない音色は、防音ドアを開けた途端に止まった。

「あ、先輩。」

後ろ手にドアを閉める私に、三重野さんの視線が飛んでくる。

やつぱり一時間はちよつと長かつたかな。明日からはもう少し短くしてあげようと思ひながら、彼女のそばに歩み寄つた。

「ごめん、邪魔しちゃつたかな？」

「そ、そんなことありませんっ。ドアの音がしたので気づいただけです。」

「そつか。それじゃあ、今日の練習の成果を見せてくれる？」

「はいっ。これ、弾けばいいんですよね？」

「うん、そうだよ。ゆつくりでいいから弾いてみて。」

鍵盤を叩く彼女の手はやつぱり小さく、指は細くて、白鍵がとて大きなものに見える。とても大変そうだけれども、一生懸命弾いている彼女がとても可愛く見えた。ふと彼女の顔も見

てしまうと、やつぱり可愛い。……いけない、このまま見とれないように、気をつけないと。

わずか数十秒の演奏が終わると、不安げな顔がひよつとこちらを向いてきた。

「……あ、あの、どうですか？」

「うん、よくできました。うまくなつたね。」

「ありがとうございます。」

一転明るくなつた表情。こんな嬉しそうな顔をされちゃうと逆に注意しづらい。

「少しだけ注意ね。弾くときは指の形と手首に注意して。えつと、今の三重野さんはこんな感じになつてるんだけど……。」

彼女の真似して弾いて、次に正しく弾いて、その差を見せてあげる。

「こんな感じで。指先は丸くして、反らないようにしようね。」

手首は持ち上げたまま落とさないように。じゃあ気をつけて、もう一度弾いてみて。」

「はい。」

私も昔、先生にさんざん怒られたなあ。あのときの先生の気持ちちは、こんなだつたのかな。喜んで演奏している子に注意するのは気が引けるけど、これも、うまくなつて欲しいから。

再び演奏を始めた彼女、指の形はよくなつたかな。けれども手首は落ち気味。

「ほら、手首上げて。」

彼女も将来、私からさんざん言われたことが記憶に残つてし

まうのだろうか。

練習のあとに知ったのだが、三重野さんは二時間以上もかけて通学しているそうだ。何の気なしに住まいを聞いたらそんな答えが返ってきてびっくり。

「二時間を超えると、一番遠い部類かしらねえ。」

「聞いておいてよかったですよ。五時半にここを出ても、家に着くのは八時近くなっちゃうんですよね。」

「そうねえ。大変よねえ。」

紅茶をいただきながら、今日も今日とて、とりとめのない話をしていくのは保健室。

今ひとつ気がない返事なのは、まだ執務机に座って仕事をしているかも知れない。高子さんはいつも、この時間にはティーテーブルでくつろいでいるのだが、今日はまだパソコンと睨めっこ。

「もう少し早く帰してあげた方がいいんじゃないか。」

「……ふうん、大事にしてるんだ？」

でも肝心なところでは嫌みを言い忘れない人。パタッとノートパソコンを閉じると、意味深にやけてこちらを見澄ましている。

「べ、別に、特別な意味なんかありませんよ。単純に、大変だなんてだけです。」

「でも、大事にしすぎるのもよくないわよ？ 籠の中の小鳥がその籠をどう思うかは、よく考えた方がいいわ。」

「だから、違いますって。単に三重野さんのことを心配しているだけなんですから。」

「あら、そう？」

そう言いながらも全然わかっていないであろう、ひょうひょうとした顔で机から離れ、高子さんはテーブルの向こう側に腰をかけた。そして、まだにやにやと私の顔を見ている。

「そうです。絶対にそうです」

「そんなことはないでしょう？」とでも言わんばかりの瞳に見つめられると、私自身が私を疑ってしまいそうになる。けれども再三言っている通り、三重野さんのことを特別に想ったりはしていませんっ。

「そっかあ、なら、いいけど。何か困ったら姉さんに相談するのよ？」

「もつと困ったことになりそうなので、お断りします。」

お約束の答えに、高子さんはいつも通り不満そうな顔をして、二人は思わず笑ってしまった。

四月も下旬になるとは言え、十九時を過ぎてしまおうともう暗い帰り道を、今日も高子さんと一緒に歩いている。保健室での話と同じく、なんてことない話題ばかりだった。

「そうそう、香澄ね、妊娠したんだって。」

けれども流れに乗って軽々しく放たれたその言葉を、聞き流すことはできなかった。かと言って適当な返事もできず、私は押し黙ってしまふ。暗闇に訪れた沈黙。破るのは高子さんの努

めて明るい声。そう、努めて、明るい。

「……やだな、千絵里ってば。そんなに暗くならないですよ。結婚したんだから、不思議なことでもないでしょ？」

その通りだ。高子さんの言う通りだ。わかつてわかつているけど。

香澄さんは、高子さんが今も想い続けている人。「結婚したからって、好きじゃなくなったりはしない」と笑顔で言っている。けれど、好きじゃなくないと思う。好きな人が私じゃない誰かと結ばれるのは、どうしたって辛い。少なくとも私には、耐え難いほど痛かった。だから余計に何も言えなかった。慰めようもないことを、知っているつもりだから。

「とは言え、千絵里の思う通り、それなりに堪えたわ。そりゃそうよね、香澄のこと好きなんだもの。私だけを見て欲しいって、未だに思うんだもの。」

天を仰ぐ瞳に、彼女は涙を浮かべてはいないだろう。けれども私は呆然とすることが精一杯で、ともすれば私の方が泣き出しそう。笑顔でいてあげることすらできない。今まで助けてもらった恩返しを、何一つできない。

「だからさ、ありがとね、千絵里。話し相手がいなかったら私、壊れちゃったかも。」

相変わらずどうってことない風に言う高子さんに、私ができることなんて。

何も無いなんてダメ。そう強く叱責して、思いついた唯一のこと。

私は夜道での歩みを少しだけ、緩めた。彼女が帰り道に打ち

明けた意味を、なくしてしまうとしても。

放課後になると三重野さんにピアノを教えながら自分でも練習をして、終わったなら保健室に寄って高子さんと帰る。高子さんと帰るようになってからは三週間、三重野さんに教えるようになってからは二週間も経っていないのだけれども、すっかり日常になってしまった。

それまではずっと一人で練習をして、終わったなら裕子と帰っていた。裕子に恋人ができたとき、楽しい日常が変わってしまったことにも寂しさを覚えた気がする。でも結局、変わりはしなくても、楽しい日常であることは変わらなかった。構ってくれなくなつた裕子に恨み言を言ったこともあるけど、私だつてなんだかんたどうまくやつてるんだなと思つたりもする。

今日も三重野さんを見送り、私一人の練習時間を終えた。でも今日は、このあとが新しい日常とちよつと違う。あの頃のようには裕子を教室まで迎えに行こう。あの頃、なんて大袈裟かな。つい二ヶ月前までのことなんだから。でも確かに、あの頃という言葉がしつくり来るんだよね。

「裕子おーつ、いるかあー？」

教室が見えてきた廊下の上で、思いつきり叫んでみる。

「いるよおーつ。」

負けじと大きな声が返ってきて、見慣れた顔がひよっこりと教室から出てきた。

「意外。ちゃんと覚えてたんだ。」

「覚えてたも何も、今朝私が誘ったんでしょ。いくら何でも忘れないよ。」

「裕子は恋愛ポケケひどいからなあ。今朝のことも危ないかと思つた。」

「もおつ、そんなことないつてば。そんな薄情じゃありませんつ。」

今朝、裕子はわざわざ私の教室までやってきて、「木曜日は千絵里と帰ることにしたいんだけど」と言つた。メールでも済む用事なのに、わざわざ言いに来たのは彼女なりの気遣いだったのだろう。もちろん私も、嬉しかった。

校門をくぐり、歩き慣れた道を、久々の組み合わせで歩いている。冗談言つてからかうのも久しぶりのように思えるけど、先週も一日はこうして一緒に帰つたな。

「伊吹とはうまくいってる？」

今の裕子には、身体が勝手に聞いてしまう。

聞くまでもなく、うまくいっているのは知ってるんだけど。何を期待しているつもりもないんだけど、気づかぬうちに、やつぱり期待しているのだろうか。

「うん、多分。初めてだから、本当にうまくいっているのかよくわからないけど。毎日楽しいし、仲良くやっているとと思うよ。」

「そっか、いいことだな。」

裕子の答えは予想通りながら、何となく幸せ感に欠けている気もする。

それは私が期待する何かが、そう思わせているのだろうか。あるいは本当に何か欠けているのだろうか。判断に迷うと、素っ気ない答えしか返せなかった。それ故に私の答えは、客観的にもどこか不自然のかも知れない。裕子は少しだけ目を逸らしながら、謝罪とも付かぬ言葉を綴る。

「あのお、その、ごめん。なんて言うか、二人のときは、私たちのことに気を遣わなくていいからね。」

「大丈夫、わかっている。」

そう、わかっている。彼女に謝る理由なんて、ないのに。

恋人ができたこと、私より恋人を選ぶこと、そんなことは全然気にしていない。むしろ応援だつてしている。けれども、結果として、二人でいる楽しい時間が減つてしまうことがちよつと残念なだけ。そこまでは、私も同じ気持ちだから。

そこまで、か。それ以上はどうなんだろう。私はまだ伊吹が好き。それ故に何か期待していることがあって、裕子のことを疎ましく思つていて。そんなことは、ないと思つているんだけど。少なくとも、彼女は知らないだろうから、私も知らない振りぐらいはしているつもりなんだけど。今ひとつ自信が持てないのは、この気持ち。今はただ、誤魔化す程度が精一杯かな。

明るい表情に切り替えて、私は彼女の言葉に答え直した。

「裕子と伊吹がうまくいってくれないと、私の周りの雰囲気か

一気に暗くなつちやうから困るんだよね。私は友達少ないから、二人も暗くなつちやつたら真つ暗だよ。」

「んー、それは今のところ大丈夫、かなあ。こんなに好きになるなんて、思つてなかつたもん。」

満面の笑みで答える彼女を見て、予期せぬ安堵を覚えた。作り物の笑顔がバレなかつたからなのだろうか。それとも、私は本当に、二人がうまくいってくれることを望んでいるのだろうか。

裕子は楽しそうに伊吹との話を続けていた。そんな裕子を見て、意外と私も楽しかつたりする。まさに意外。私の好きな人が、他の人と恋している様を聞いて、何が楽しいんだろう。全くわからないけど、少なくとも今は楽しかつたりする。デートでどこへ行つたなんて、絶対に聞きたくないと思つてただけだな。

あり得ないことだと思つていたが、もしかしたら、私は二人の幸せを望んでいるのかも知れない。

「このケーキ、凄くおいしかったよ。今度、一緒に行こっか？」

「いいよ、裕子にはそんな時間ないでしょ？ 一人で行くか、誰かと行くかするから。」

「えー、そんなこと言わないでよ。千絵里と行きたいのにな。」隣でふくれてみせる裕子に、私は笑いをこぼさずにはいられない。本気で、私と行きたいんだろな。私だつて、裕子と行きたいから。今はとりあえず、私が二人をどう思っているかなんて、置いておいてもいいのかな。

そうとなれば、いつも通りに。幸せな子は少しぐらいいいじめてあげないとね。

「でも、土日の予定はいつばいなんでしょ？」

「うー、そりやそうだけど。」

「なら、行けないな。」

「千絵里の意地悪。」

「ま、二人で楽しくデートでもしてなさいな。私は気兼ねなくケーキを食べてきますよ。」

「ずるいよ、私だつて食べたいのにな。」

「何言ってるのよ？ 裕子は食べに行つたんでしょ？」

「だ、だつて、あんまり食べられなかつたんだもん……。」

ははあん、まあ、そりやそうだよな。普通のカップルならいざ知らず、ちよつと特殊なこの二人。わずか二ヶ月じゃそんなには進まないか。またまた、二人でいるときは緊張しっぱなし、と。

そう考えた途端、どこか安心してしまふ。置いておいたはずの感情がやつぱり表に出てきてしまふ自分に嫌忌を覚える。けれども、この気持ちとは一生付き合つていかなければならぬのかも知れない。置いては、おけないのかも知れない。

だから多少は聞えもあつたけれど、意外と楽しくおしゃべりしちやつたかな。なんて、なんだかおかし。この数十分、気持ちが変わっている。悩んだり、悩むのやめたり。また悩んだり。

そんな姿が裕子には、私が変わつたように映つたみたい。

「千絵里、前より女の子っぽくなったね。もし何かあったら、今度は私が相談に乗るから。」

裕子が先に下車するために席を立とうとしたとき、相も変わらず幸せそうな笑顔で、何も知らない笑顔で私に言い放った。

「はいはい、ありがとうございます。ほら、降りないとドア閉まるぞ。」

確かに、私は変わったのかも知れない。

「うん。じゃあ、また明日ねっ。」

「ああ、じゃあな。」

女の子っぽくなったのかはわからないけど。

扱いに困る気持ちが増えたことは、私を変えるに十分な材料だろう。

さすがに言っただけなので、構えは正しい。でも弾き出すとつい、手首が落ちて、指の形も崩れちゃうみたい。私もそうだったんだけど、ひよつとして、みんなそうなのかなあ。

「そうそう、今は綺麗な形だよ。じゃあね、私が手首の下を押さえているから、そのまま弾いてみて。」

真っ白で小さい手を、下からそっと支えてあげる。

一生懸命に弾いている彼女の横顔は、小さな手を一心に動かしているのと相まって、とても可愛い。なんだかぎゅうって抱きしめたくなっちゃう。

けれどもそんなことをするわけにもいかないので、演奏が終わったら、支えていた手で彼女の手を握ってあげるだけ。想像していたより柔らかくて、温かい。

「うん、今の感じを忘れないで。手首を意識してあげるようにしてみようか。」

「はい、わかりました。」

「よろしいっ。今日はこれでおしまい。」

忘れずに手を解くと、彼女は片付けを始めた。なんだか嬉しそうに楽譜を鞆にしまっている三重野さんを見て、ふと。

「ねえ、たまには一緒に帰ろうか?」

何の気なしに言ったのだけれども、困らせちゃったみたいだ。振り返った三重野さんは迷っている感じだった。

「えっと、その、ご迷惑じゃ、ありませんか?」

「あ、ごめん、単なる思いつきだからさ。三重野さんの都合が悪ければ気にしないで。」

「そんなことありません、私は全然大丈夫です。でも、先輩はいつも、このあとに練習なさっているみたいだから……。」

ふるふると首を振りながら説明する三重野さんがとつても可愛い。しばらくこの姿を見ていたくもあるが、思いつきで気を遣わせちゃうのも悪いよね。

「それなら気にしないで。さっきまでも練習してたし、家でやってもいいんだから。」

「……本当に迷惑じゃありませんか？」

「うん、全然。」

「それなら、一緒に帰りたいです。」

ぱあつと顔が明るくなったように見えるのは、私の勝手な思いつきからだろうか。そんなことないと思うんだけどな。だって、本当に私のことを心配してくれていたみたいだもん。

「ありがとう。じゃあ、帰ろっか。」

喜んで返した答えに、彼女も嬉しそうにしているよね。

こんなやりとりをするたびに思う、三重野さんは凄く優しい子なんだなって。その優しさで、世界を見ている子なんだなって。初めて会ったときから感じている奥手さは、きつと優しさ故。

三重野さんが練習を始めるときに、視聴覚室で練習しようとして行く私を見る目は、不安や心配じゃないんだと思う。不安ならもう慣れてもいいのに、まだ、毎日そんな目をしている。きつと「私が先輩の練習場所を奪っている」とでも思っているんじゃないかな。今もそう。「私のことを気にして、自由を奪

っているんじゃないか」って。

確かにそうかも知れない。けど、奪われたい自由だって、あるんじゃないかな。私は、彼女にお願いされたり、無理言われても、全然嫌じゃないんだから。お願いされたいくらいなんだから。

「あの、どうしましたか？」

「へ？ あ、うん、ごめんごめん、ちよつとぼーつとしちゃった。ごめんね。」

突然現実に取り戻されたようで、つい間抜けな答えを返してしまった。私ったら何を考えているんだか。目の前の彼女を見て、改めて笑顔になった。

もし彼女が私と一緒にいることに心配になっているのなら、私と一緒にいたいんだよって伝えてあげたい。そんな気持ちも込めての笑顔なんだけれども、彼女には伝わっているのだろうか。

音楽室と視聴覚室の鍵を職員室に返し、三重野さんとともに保健室に向かう。予定を変更して早めに彼女と帰ることを、高子さんに伝えるため。それに明日のこともあるので、一言声をかけておきたかった。

「失礼します。」

「失礼します。」

「いらつしゃあい。ちよつとそこで待ってー。」

白衣を着た女性が、腕に書類ファイルを抱え、スチールキャ

ピネットの前で戦っている。どうやら戦況は不利な様子、見ていて危なっかしい。手伝うかな。

「三重野さんはそこに座ってて。」

彼女をティーテーブルに案内してから、高子さんの横に立つ。

「それ、持つてますから。貸してください。」

「あ、ありがと。お願い。」

受け取ったファイルはずしりと重い。よくこんなの持つてたなあ……。

「あー、ファイル、上から一つずつ渡してちょうだい。」

「はいはい、ちよつと待つてくださいね……。」

そうしてももの数分もしないうちに、無事、腕いっぱいにあつたファイルは片付き、三人揃つてティーテーブルに向かつている。テーブル備え付けの椅子は二脚だけなので、私は保健室や病室でおなじみの丸椅子を引つ張つてきて座つた。

「ごめんなさい、見苦しいところを見せちゃつて。それで、どしたの？ 今日は何？」

いつもより早い時間であることはもちろんだろうが、むしろいつもより一人多くここにいることが気になつていようだ。

高子さんはにこにここと三重野さんに微笑みかけながら、お茶を勧めている。

「三重野さんと一緒に帰る前に、明日のことを話しておいた方がいいかなつて思つて。」

「ああ、そうね。じゃあ、お昼にうちの駅まで来てよ。」

「え？ お昼ですか？ 待ち合わせは五時だよね？」

私が三重野さんに確認すると、間違いなく。

「はい。駅前に五時です。」

楽しみそうな三重野さんの言葉を受けて、ほら、五時ですよと改めて言おうとしたら。なにやら目を輝かせている高子さんが口を開いた。

「それはわかつてるわ。だからそれまでに、着ていく洋服を選ばなくちゃならないでしょ？」

「あの、洋服ぐらい自分で選べるんですけど……。」

嫌な予感がして、いかにも訝しげだと言わんばかりに反論したところで全くの無駄。

「何言つてるの。千絵里に任せておいたら、制服でも着て来かねないでしょ。そんなのダメよねえ？ 可愛い服の先輩を見たもんねえ？」

「えと、あの……、はい……。」

キラキラとした目が二人分、私に向けられている。

高子さんの目の輝きは、私の予想を超えた服でも選り抜いてきそうで少々頭が痛い。だから多少は嫌そうにしてみるけど、三重野さんの瞳の輝きには抗えないかな。だから、結局快諾しちゃうんだよね。

「わかりました。明日のお昼、駅まで行きますから、迎えに来てくださいね。」

「了解。それじゃ二人とも、また明日ね。」

「はい。さようなら、先生。」

「じゃあ、明日のお昼にー。」

そして三重野さんと保健室を出る、はずだったんだけど。後ろから含みのある声が飛んでこようとは。

「あ、三重野さん、送り狼には注意しなさいよ？」

ちよと、ちよと、何言ってるんですか。

と、ここでうろたえては思うつば。落ち着け私。無視して帰ろ帰ろ。

「あー、今のは気にしないで。さ、帰りましょう。」

三重野さんの手を取り、今度こそすーっと保健室を出ようとしたとき。

「……送り狼って、何ですか？」

無垢な笑顔で聞かれた私に、どんな選択肢が残されていようか。とりあえず、お茶を濁す。それかな、やつぱり。

三重野さんとは前の駅で分かれて、今は私一人、いつもの電車に揺られている。

遠いとは聞いていたけど彼女がどこに住んでいるかまでは知らなかったので、私と全然違う方向だと知ってちよつとがっかり。高子さんとはそもそも逆方向だから、最近の電車内は一人が多い。以前は毎日裕子と一緒にいただけに、何となく寂しかったりする。だから三重野さんとおしゃべりしながら帰れるの、楽しみにしてたのにな。

仕方ないので、さつきまでの短い帰り道に話していたことを思い返そう。あれ？ 何を話したんだっけ？ あ、明日の洋服や料理の話はしたかな。あと、ピアノ好きになった？ って聞

いた。好きになったって答えてくれたんだよね。えーつと、あとは？ ……なんかせつかくの時間を無駄に使っちゃったみたいな、もつたいないことをしっちゃった気分。もつとちゃんと話せばよかったかな。

でも帰り道のおしゃべりなんて、だいたいそんなものなんだけどさ。隣に三重野さんがいるだけで、楽しいんだから。そういうものだよ。

そんな声がなくなつておそろく、私たちは目立っていただろう。さして人が多くもない駅前、視線を独占しているのは間違いない。

「うあく、先輩も先生もかつこいいですう。」

先週の洋服も私たちとしては恥ずかしかったものの、世間的にはまだ普通な範囲だったらしく、そんなに視線を集めることはなかったと思う。けれども、今週は明らかに注目の的だった。カップルのように二人で揃えてしまったのも原因かも知れない。

「あのね、三重野さん。これは高子さんの趣味だからね、誤解しちゃダメだよ？」

私がそう言わずにはいられない今日の服飾。センスは悪くな

いと思うんだけど、これを来て電車に乗るつて発想は普通じゃない。

私が着ているのは瑠璃色と白のスパイラルドレス。基調は暗めの瑠璃色で、斜めにティアードになったスカート部が白、純白と言うよりは若干オフホワイト気味。アシンメトリなデザインと配色が適度に鋭い印象で、スクエアネックとあわせて女の子っぽすぎないのが素敵だと思う。思うけど。

高子さんが着ているのはダブルのパンツスーツ。黒の、と言えれば集まる視線も多少減ったと思うのだが、大きな衿の片方だけがワインレッドなのだ。これがハッキリと目立つ。そしてスーツとドレスという並びが高子さんの狙い通り、ちよつと危うい感じ。確実に女二人なんだけれども、カップルに見えてしまう。

電車で一時間以上の移動中。いつたい二人の関係はどんなだろう。何にしろあの服装はねえ。冷たい声の聞こえる視線が、これでもかと言うほどに突き立てられたのであった。

けれども高子さんは「先週よりずっとマシよ」と平気な顔をしている。今もけろりと、三枝さんとの待ち合わせ中。これが年齢の差なんでしょうか。口に出して言ったらこれからも大変なものを着せられそうだし。いや、少しは言わないと、逆に勘違いされかねないかな。

「ねえ、高子さん、ホントに恥ずかしくないんですか？」

「しつこいわね。全然問題ないわよ。先週のミニスカートに比べれば数百倍マシね。」

「うー。三重野さんも何か言つてやつてよ。ほら、弟くんも。『恥ずかしいですよ、それ』つて。」

「そんなことありませんっ。お二人ともとっても素敵ですっ。勇希もそう思うよね？」

「は、はいっ、あの、とても綺麗、ですっ。」

「ありがとう、二人とも。ほうら、千絵里が気にすぎなのよ。」

「いや、絶対違うと思うんですが。」

こうして洋服談義に花を咲かせていると、まもなく三枝さんが車に乗つてやつてきた。

「こんにちは、お待たせいたしました。うわあ、お二人とも素敵です。これは私たちも負けていられませんか？」

挨拶の一部として、彼女はとんでもないことを言つてのけた。とんでもないこと、だと思っただけでもない。彼女にとつては普通なのかも知れない。彼女は本物のお嬢様で、衣装部屋すら持つていそうな子。だから、三人分の着替えを用意することなんて造作もないことのようにだった。

三枝さんの家に着いた後、早速着替えに入った三人が戻つてきた。

三重野さんも三枝さんも、三重野さんの弟、勇希くんまでもがドレスめいたものを着ている。勇希くんは当然嫌がつたみたいだけど、三枝さんは一人っ子。いくらお嬢様と言つたつて着ようのない男物の服までは揃えていないので、三枝さんが何年前に着ていたものを着せたそうだし。……可哀相だけれども、

これが結構似合っている。

「誰が一番可愛いかな？」

目の前の四人を見比べながら、高子さんが言う。三重野姉弟は恥ずかしそうにどぎまぎ、三枝さんは慣れた様子でにっこり微笑み、私はきつと呆れ顔だろう。けれどもこの手の話題は盛り上がってしまうもので。

「いいなあ、紬希と勇希くん、可愛い。姉妹みたいだよ。私も弟欲しいなあ。」

「えっ、え、私なんてそんな可愛くないよ。勇希は可愛いけど……。」

「……………僕、これ着てなきやダメ？」

「ダメ。私より可愛い罰。」

「私より、って、高子さんは可愛いと言える年でもないでしょうに。」

「年齢の話禁止。どうせ私だけ年増ですよ……。」

「そんなことありませんよ。先生もとても素敵です。津村先輩と姉妹だって言われても違和感ありませんもの。」

「そうかな？　そうよね？　ほら見なさい千絵里、私だってまだまだいけるんだって。」

「はいはい。その年になつてお世辞と本音の区別も付きませんか。」

「先輩、それは言い過ぎじゃ……。」

「そうよ、言い過ぎよ。三重野さんはいい子ねえ。」

ちなみに私の見立てでは、三重野さんがやっぱり一番可愛い

かな。まだお子様体型だからちよつと決まらないけど、天賦の才は確実にある。あと何年かしたら、とびきりの美人になると思う。そのとき私は、まだ大丈夫だよ。二十歳ぐらいたもん、彼女の隣に並んでも全然おかしうなかなないよね。ちよつびり未来の私たちを想像してみると、なんだか凄く楽しそう。

もちろん、今だつてとつても楽しい。夕食をいただいている最中もずつと笑顔。

それぞれの晴れ姿、なのかな、とにかく普段は見ることのできない格好をひとしきり褒め合つて、私たちは予定通り食卓に着いた。最初は運ばれてきた料理に驚きおとなしくもなつたけど、今ではさつきより賑やかだ。よくしゃべる高子さんに、きつちりと受け答える瑠璃さんのおかげもあつて、半ば初対面とは思えないほど話は絶えない。

「瑠璃ちゃんと紬希ちゃんは、いつからの友達なの？」

言われてみれば、気になるな。気さくな話しぶりからは想像も付かないけど、瑠璃ちゃんは生粋のお嬢様。紬希ちゃんは私たちと同じく全然普通。なんだか、よほどのことがない限り仲良くなかなれない気がしてしまう。

なお、高子さんの提案により、先ほどからみんな、名前で呼び合うことにしている。「仲良くなるのもまず形からよ」などと言っていたが、勇希くんに配慮したんじゃないかと思う。女の子の格好をさせられているだけでもだいたい子ども扱いなんだけど、呼び方まで一人「勇希くん」だと居づらくなつて気を配つたのだろう。さすがは養護教諭のお姉さん。こういうとこ

ろは見習いたいな。

「それはですね、去年の九月、保健室での出来事からなんですよ。」

妙な含みを持たせて話し出す瑠璃ちゃんに、高子さんは期待通りであるうつつこみを入れている。

「ちよつと、私の神聖な職場でなんてことをしてくれたのよ?」  
いや、そんな、情事があつたみたいなこと言わないでくださいよ。そんな汚れているのは高子さんだけですから。

呆れるほかない状態で何となく同意を求めんと紬希ちゃんを見ると、堅いと言うか、暗いと言うか。表情に少し陰がある気がする。私と初めてあつたときもそうだったから、人見知りする方なのかな。でも、さつきまではこんなじゃなかつたんだけどな。気のせいかな。

「ちよつとベッドをお借りしただけです、ね? 紬希。」

「あ、うん、そうなんです。あの日、高熱でふらふらしてたら、急に瑠璃が私の手を引いて保健室に連れて行つてくれたんです。」

二人は天然ボケコンビなのか、高子さんの露骨なつつこみなどお構いなしだった。もちろん、高子さんはちよつと残念そう。けれども、高子さんがそのことを覚えてないなんて変だな。この人、仕事に抜かりはないと思うんだけど……。

「あら? あのととき、ベッドにいたのは紬希ちゃんだけだったと思うけど……。ひよつとして、瑠璃ちゃんはバレないように隠れたの? 私はそんな野暮じゃないから、見逃してあげる

のに。」

さすが高子さん。何がバレないんですか。何を見逃すんですか。でも、ちゃんと覚えていたんですね。

「凄いですね、先生。覚えてらっしゃるなんて。その通りです、あの日保健室に行つたときには先生は不在でした。先生が見えるまで一緒にいるつて紬希には言つたんですけど、授業に戻れと強く言われて、私は保健室をあとにしたわけです。」

「それで私が戻つてきたときには、ベッドに紬希ちゃんだけがいたわけね。」

それは残念なことで。なんて聞こえてきそうなんだけれども、相変わらず二人は気にせず。

「はい、そうなんです。」

「あ、あのときは、お世話になりました。」

「どういたしました。でも、あんな高熱があるのに学校に出てきたりしちゃダメよ?」

「はい……。」

申し訳なきように俯く紬希ちゃんが可愛いな。

なんだか不謹慎な気がするそんな思いとともに、高子さんと私のことも思い出す。普段は使うことのなかつた一室、保健室で、いろいろなことが起こるもんだと妙に感心してしまつた。

「ちなみに千絵里と私も保健室での出来事がきつかけだったのよ。千絵里が振られて泣いているのを慰めてあげた私。ちよつと素敵な話でしょう?」

……そう、ですね。つて、ちよ、ちよと、何をあつさりとし

やべつてるんですか。

「何言ってるんですか。この話はどういいですからつ。」

大慌てで口止めを試みるも、あつさり失敗。

「えーっ、誰に振られたんですか？」

いや、そこは言わなくていいから。瑠璃ちゃんも聞いちゃダメっ。

「一つ上の先輩でね、この前卒業しちゃった子。」

「千絵里先輩、優しいし、綺麗なのに、なんで振られちゃったんですか……？」

あー袖希ちゃんまで乗らなくていいからつ。そんなに目をキラキラさせないでつ。

「それは、秘密。よい子のみんなには言えない理由によるわねえ？」

ねえ？」

ねえ？ じゃありませんよつ。

「えー、教えてくださいよう。」

「どーしよつかなあ。勇希くんは、知りたい？」

高子さんがふと水を向けると、頬を染めた美少女がごくんと頷いた。

……なんで頷くのよつ、やめてえ。

私は俯いて知らん顔するしかない。それでも顔は真っ赤だろうし、もう、恥ずかしくてどうにかなりそうた。

「じゃあ全会一致つてことで。千絵里は以前にね、その先輩の告白を断つたのよ。その後数年経ち、もう、違う人が好きでしと。」

うあ、全然隠してない。事実しゃべつてるよ。

「え？ 一度断つた相手なんですか？」

「そうなのよ。お高くとまっちゃつて素直になれなかつたのね。」  
確かにそこは伏せてくださつてありがたいのですが、なんか、私、凄く性格の悪い子になつていような……。

「あ、あの、ちよつとお手洗ひに行つてきます。」  
どうにも居たまれなくなつて私は席を外した。

はつとしてごめんなさいと言いたげな袖希ちゃんには悪いけど、「気にしないで」という余裕すらない。

賑やかな部屋を出て扉を閉めると、静まりかえつた廊下が左右に伸びている。

……はあ、お手洗ひ、どつちだろ。

「ごめんなさい。」

意外な言葉とともに、ふと開いた扉から出てきたのは袖希ちゃん。

「本当に、ごめんなさい。その、先輩の気持ちも考えないで。」  
こんな表情を見ると、やはり何も言わずに出てきてしまったことを強く後悔する。そんなつもりじゃないのに、凄く心配かけちゃつて。

「ううん、気にしないで。私の方こそごめんね。嫌だつたんじやないの。……ああいうのつて、恥ずかしいじゃない？」

「えつ、あ、はい、それは……。」

「それだけ。あんな話ができるの、私だつて楽しいんだけどさ。」

自分のことになつちやうとダメなんだよね。」

「紬希ちゃんもわかつてくれたみたいで、表情にも薄日が差し  
てきた。よかつた。このまま悩ませてしまったら、私がいくら  
謝つても足りなかつたよ。」

「……先輩にも、苦手なものつてあるんですね。」

「えっ？」

「あ、えと、先輩つていつも落ち着いていて、優しくしてくれ  
るし、何でもわかつていてくれるし、そんな人だから、苦手な  
ことなんてないし、何でもできるし、その。」

「ありがと。でも、私はそんな素敵な先輩じゃないよ。だから、  
苦手なこともあるし、振られたりもするんだ。」

「……あ、その、また……。」

「気にしないのお。もう終わったことなんだし、私も今年で十  
八、失恋の一つや二つ経験しなくちゃ。ねっ？」

「本当はそんな経験ありもしないけど。高子さんに聞かれたら、  
大笑いされちゃいそうだな。……あ、一応、一つはあるのか。」

「でもなんか意外だな。紬希ちゃんが私のことを、そんな風に  
見ていたなんて。振り返ってみると私自身は不安になるような  
ことの方が多いんだけど。今、紬希ちゃんに投げかける笑  
顔も、あまり自信はないんだけど。素敵つて言ってもらえ  
るよう、がんばらなくちゃね。」

「なんだかいろいろな感情とともに彼女を見つめると、彼女も  
なんだか複雑な顔。」

「は、はいっ。でも、あの、私には経験、一つもありませんか」

ら……。」

「ははあん、紬希ちゃんも興味あるのかあ。そりやそうだよ  
え。でもね。」

「んー、紬希ちゃんには経験できないかも？」

「えっ、なんですか？ ……確かにまだ、好きな人なんてい  
ませんけど。でも……。」

「だって紬希ちゃんは可愛いし優しいし。きつと、振られるこ  
となんてないんじゃないかな。つて、思うの。」

「茶目つ気たつぷりに言つてはみたけど、本気でそう思つてい  
る。だって、紬希ちゃんを振るなんて、絶対にあり得ないと思  
うもの。私だったら一生を誓えてしまうかも。それぐらい素敵  
な子。」

「でも、こういうのつて、言われたら恥ずかしいんだよね。だ  
つて、今、紬希ちゃんも真つ赤な顔してるもの。」

「そ、そんなことないですつ。私なんて、その、全然ダメな子  
ですから。」

「ふふっ、ごめんね。困らせちゃつたかな？ でも、紬希ちゃ  
んは本当に素敵な子だと思う。私、大好きなもの。」

「恥ずかしながらも喜色满面、彼女は私に言い返す。」

「ありがとっございませす。私も、千絵里先輩のこと大好きです。」  
私もきつと、満面の笑みだな。

「なんて落ち着いて考えているようだけど、全然。本当に嬉し  
くて、この笑みを解くことができないよ。」

「ところで先輩は今、彼氏、いらつしやるんですか？」

「いないいない。全っ然いない。」

嬉しすぎて羽目が外れてしまったのだろうか。自分でもよくわからないほど、真剣に否定している気がする。言葉には表れていないかも知れない、けれども、凄く強く、否定したい。なんでだろう。確かに、全然いないのは事実なだけどさ。

紬希ちゃんと一緒に戻ると、部屋の中は明るい声で満たされていた。私が出て行った件は、高子さんがうまく説明してくれたのだろう。ありがとう、高子さん。

話の輪に再び戻り、またしばらくおもしろおかしな話をしていると、いい時間になってしまった。そろそろ帰りましょうかという高子さんの提案に、瑠璃ちゃんが車で送っていきますよと言ってくれる。せっかくなので瑠璃ちゃんの申し出を受け、紬希ちゃんと勇希くん、そして私は家まで車で送ってもらうことにした。高子さんは残念ながら反対方向なので、最寄り駅まで。

送ってもらう車の中でも、まだまだ話は続いていた。けれど紬希ちゃんたちが降りたあと、いくらか雰囲気は変わって。

「先輩は今、好きな人っているんですか。」

そう瑠璃ちゃんに聞かれたとき。何となくうまく答えられなかったことが引つかかっている。

「好きな人は、いるのかな。振られても、好きなのは変わらな  
いから。」

恥ずかしいとか言いつらいとか、そういうわけではなく。決

まり文句のように唱えられるはずの科白が、どうもハッキリ出てこなかった。

誰にでも時々、あるいは毎日のようにと言う人もいるとは思  
うが、やる気の起きない日があると思う。私の場合、今日がそ  
の日に該当したらしい。理由もなくやる気が起きない。疲れて  
いるとか、憂鬱だとか、体調が悪いとか、そんなんじゃないん  
だけど。授業も上の空、やつと放課後まであと少しという今、  
掃除をやる気も全く起きない。ただ単に、何もせずにぼけつと  
していたい。

高子さんのところにお茶を飲みに行くのも一案だが、この時  
間は保健室でも掃除が行われる。いくらやる気が起きないと言  
っても、みんなが働いている横で怠惰に過ごす気にはなれない。  
仕方ないので、屋上入り口前の踊り場でぼーつとしていた。天  
気もいので屋上に出たいところだが、鍵がかかっている外に  
は出られない。

ふと時計を見ると、あっさり二十分ほど経過していた。そろ  
そろ掃除の時間もおしまい、戻ろうかなと立ち上がり、やつぱ  
りやる気が起きないと教室までふらふらと歩いていった。

——っ。

あれ？ 今、何か聞こえたような気がするけど。

人気の少ない特別教室棟から掃除の後片付けで賑わう普通教室棟に抜けようとしたとき、喧噪に混じり、何か、耳慣れない音が聞こえた気がする。

——やつ。

……声？ 悲鳴？

掃除中の教室では陽気な悲鳴も珍しくはないけど、そんな感じではない。本当の悲鳴、とても言おうか。音は近かったと思うんだけど、どこだろう。まだここは特別教室棟で、すでにどの教室も掃除を終え、いつも通り鍵がかけられているようだ。改めて見回すと、そもそも人がいそうなのは少し先にあるお手洗いぐらいだろうか。

お手洗いの入り口に近づくと水の音がする、まだ掃除中なのかな。じゃあ、足を滑らして転んじゃったとか？ そんなところか。今日の遅い歩みのおかげであれこれ考えながらお手洗いの中を覗くと、今ひとつ理解に苦しむ光景。ホースを手に水を撒いているようだが、掃除をしている風な丁寧さはない。……高校生にもなつて、トイレで水遊びするか？

「何してるの？」

思つたままに声をかけたところ、彼女たち、その場にいた三人の女の子たちはホースを投げ出して去つて行つてしまった。

「あのさあ、掃除の片付けぐらいはちゃんとしようよ。」

掃除をサボつた身であることを棚上げし、やむなく蛇口をひねり水を止める。床に転がり、放水をやめたホースの口を眺めたとき、はたと気づいた。

床のタイルが濡れてない。

正確には、三つ並んだうち真ん中の個室から排水溝まで、そこだけが濡れていた。

惚けていた私もさすがに気づき、目が覚めた。まさかうちの学校でこんな事態を目の当たりにしようとは。

——コンコン。

使用中となつている唯一の個室にノックをして、声をかける。

「あのさ、大丈夫？ よかつたら開けてくれない？」

「……………」

反応なし。状況が想像通りなら案の定と言つたところか。

しかしそういう状況ならなおさら見捨ててもおけないので、隣の個室に入り、便器に足をかけ、個室を区切る板に手をかけ、軽くジャンプした。こんなときは背が高くてよかつたと思う。個室を区切る板の上にひよいと顔を出して、隣の様子を覗き込む。

……見たくなかつたな、こんなの。

女の子が一人、個室に閉じこめられて放水されていた。やはりそう見て間違いなさそうだ。

「ねえ、そのあなた。ちよつと右側にずれてくれないかな。

私、降りるから。」

「……………」

答えは返つてこないだろうと踏んでいたの、反応など待たない。彼女にぶつからぬよう注意しながら、隣の個室に滑り降りた。

て……」

「到着つと。ねえ、あなた、大丈夫？」  
 いつこうに反応はなく、ただ顔を押しえて俯いている彼女。どうするか。とにかく落ち着かせた方がいいのかな。私は正面から彼女の両肩を支え、屈み込んで俯いた顔を覗こうとした。……この髪型。まさか。

「紬希ちゃん……？」

まさか、そんなはずは。そう無理にでも思つて、覆つていた彼女の手をどかして顔を確認したけど、間違ひなかつた。信じたくはない惨劇、けれども状況は事実を否定させてくれない。

「ごめんなさい……、あ、あの、その……」

泣いているわけではないみたいだけれども、頭から浴びせられた水のおかげで、髪も顔も、ひいては制服もびつしより。とにかく、紬希ちゃんを何とかしてあげないと。

「えつと、えいと、そうだ、まずは髪を拭こう。ね？」

ポケットからハンカチを出して、彼女の髪を拭いてあげる。綺麗なセミロングの髪が水に濡れて台無し。さっきの奴ら、あとで締め上げてやる。むろん怒りも覚えたが、今はさておこう。とにかく紬希ちゃんを落ち着かせてあげるのが先。

どうしたらいい？ 水を吸いきつてしまひ役立たずのハンカチで彼女を慰めながら、必死になつて考えた。あーっ、こんなときになんで考えが浮かばないんだろう。無力な自分にやきもきしていると、期せずして穏やかな声が聞こえる。

「あの、千絵里先輩、大丈夫ですから。落ち着いてください。」

「え？ あ、うん、そうだね。ごめん、私、びつくりしちゃっ

これじゃあどつちが慰められているんだかわからない。なんだか少しおかしくなつて笑みをこぼすと、彼女もおかしそうに笑つてくれた。こんなところで笑顔で見つめ合うなんて、やっぱりおかしい。

でもね。うん、そつか、そうだよね。まずは笑顔。

「えつと、じゃあ、まずは濡れた制服をどうにかしよう。このままじゃ教室に行けないもんね？」

どうにかしようと言つても、結構派手に濡れてしまつていゝ以上、脱いで替えの制服でも着るほか……あ、あるある、替えの制服。

「紬希ちゃん、制服脱いで。私の制服貸してあげるからさ、着ていって。」

我ながらいい思いつきだと感心しながら、彼女のブレザーのボタンをはずし、ジャケットを脱がせようとすると。やっぱり彼女らしく、すぐには脱いでくれないようだ。

「でもそれじゃ、先輩の制服がなくなっちゃいます。」

「あら、いいところに気がついたのね。でも気にしなくていいから。」

なぜなら、気にしたら脱げないもの。とにかく今は、紬希ちゃんに着せることしか考えたくないから。なんて言えるわけがないので、明るく振る舞いながら、手際よくジャケットを脱がし、ブラウスを脱がせてしまった。

彼女は困惑気味だったが、私があまりにテンポよく脱がせて

しまうので、なされるがままなのだろう。うんうん、この調子でお願い。迷ったら私もわからなくなっちゃう。

「よかった、下着は無事かな。いくら女の子同士でも、下着まではずすのは恥ずかしいもんね。」

濡れたブレザーとブラウスをドアの帽子掛に引っかけると、次はスカート。と、思ったけど、こんなところで全部脱がせちゃうのは可哀相かな。

「ちよつと待つてね……。」

さすがに個室の中に二人入つての着替えは狭いが、そんなことにケチを付けている場合でもない。さつきと脱いじゃおう。私もブレザーとブラウスを脱いで、彼女にブラウスを渡してあげた。

「とりあえずこれ羽織つて、えつと。」

私が先にスカート脱がないとダメか。多分ウエスト合わないんだらうなど、なんだか複雑な思いをこんな場面でも抱きながら、脱いだスカートを左手に掛けて。

「ごめんね、片足ずつ上げてくれるかな。私の肩、使つていいから。」

濡れたスカートを脱がせ、代わりに私のスカートを着せてあげた。

袖希ちゃんと私とでは、身長差は二十センチ以上ある。だから当然、サイズは合わない。スカートが落ちそうなことだけは心配だけど、この際やむを得まい。ブラウスのボタンを掛けてあげて完成。

「うん、これでよし。ちよつと大きいけど我慢してね。あ、ブレザーだけは私に貸して。さすがに何も着ないでここからは出られないから。」

私は明るく笑つたつもりだが、彼女は少々戸惑っている様子。当然のことか。けれども今は、とにかく明るく、彼女を送り出してあげることしかできない。

「制服は保健室で乾燥機にかけておくから。さ、行つて。」

「あ、あの、でも、先輩は……。」

「ん？ 私？ 気にしないでいいよ。このまま歩いたつて大した問題じゃないんだから。ね？」

ならどうして袖希ちゃんには着せたの？ 間抜けな誤魔化しようだとはわかつていたけど、鍵を外し扉を開放つて、彼女を無理矢理外へ出す。

「ほら、ホームルーム始まつちゃうよ？ 行きなさい。」

「でも……。」

やつぱり彼女は行き惑つていたけれども、背中を押して、教室に向かわせた。

さて、問題は私がどうするかだ。

濡れた制服を乾かすため保健室へ行くにしても、着替えの体操服を取りに教室へ行くにしても、それなりの距離がある。人通りの少ない分、保健室に行く方がマシか。でも保健室に誰もいないと厄介だな。ホームルームの時間がすぐそこなので、教室に戻らないとあれこれ言われかねない。掃除をサボった身で、さらにみんなに迷惑をかけるのはためらわれる。

結論。教室に行こう。下着とブレザーだけという格好を見られることさえ我慢すれば、何の問題もない。そう、私の気持ちだけの問題なんだから、問題ないと思えば大丈夫。

私は片手に袖希ちゃんの制服をひっさげ、何事もなかったように普通教室棟を歩いた。ものの数十メートル、普通に歩いていればどうってこと、あるか。そりゃそうだよ。みんな嘩然としてるよ。携帯で写真撮ってる男の子もいるよ。……思ったより恥ずかしい。

まあ、結局教室で体操服に着替えて事なきを得たと言うか、得ないと言うか。この件はおそらく、男子生徒諸君の間でその写真が交換される程度で済むんだからどうでもいい。問題は、袖希ちゃんの方だ。

ちょうど側にいた、驚嘆隠せぬと言ったクラスメイトに「体調悪いってことにしておいて」と伝え、ホームルームを投げ出して保健室へ急ぐ。運良く高子さんがいたので、簡単に事情を説明し、袖希ちゃんの制服を乾燥機に。びしょ濡れと言っても上から水をかぶっただけなので、五分か十分も回せば乾くだろう。

「あとはやっておくから、袖希ちゃんを迎えに行つてあげなさい。あ、そうそう、千絵里が戻ってくる頃には私はいないと思うけど、二人で早めに帰って。今日はちよつと、仕事ができたわ。」

乾くまで待つているつもりだったけれども、気を利かせた高

子さんの提案に乗ろう。

「そうですね、わかりました。じゃあ、お願いします。」

私は再び普通教室棟に引き返し、袖希ちゃんの教室を覗く。あ、いるいる。

大声で呼んで目立ってしまうのも何だろうから、小さく手を振ってみる。彼女は気づいてくれたみたいで、鞆を提げて教室を出てきた。

「あ、あの、さっきは本当にありがとうございました。」

「どういたしまして。ごめんね、サイズ合わなくて。もう乾いていると思うから、着替えて帰ろう。」

保健室へと歩きながら、私はさも当然のように言っただけれども。

「あの、今日はピアノの練習、しないんですか？」

「あ、そうね……。たまにはお休みでもいいんじゃない？」

私は特に気にした風もなく言っただけれども。

「そんなに気を遣っていた、だかなくても大丈夫です。こういうの、初めてじゃありませんから……。」

まさか、そんな答えが返ってくるとは思ってなくて。

「……ごめん。気づかなかった。」

謝るしか、なかった。

「いいんです、先輩は気にしないでください。逆に気づかれていたら、私、辛かったです……。」

日常的にいじめに遭っていた。言葉にすればそういうことだ

ろう。

言ってしまうえば簡単なことだが、今、どう対処したらいいのか私には判断できない。情けないけど、私は黙って保健室まで歩くしかなかった。

「失礼します。」

二人で声を揃えて保健室に入ると、ベッドを覆う目隠し用のカーテンレールに、制服を掛けたハンガーが下がっている。

「乾いたみたいだね。まずは、着替えようか？」

「はいっ。」

答える紬希ちゃんは笑顔だけれども、私はどんな顔をしているのだろうか。おそらく、まるで私の方が当事者のような、悲愴な顔をしているんだと思う。笑わなくっちゃとは思っているけど、うまく笑えているとは思えない。

カーテンレールからハンガーを取り、彼女に渡すとカーテンを引いた。

「あー、私の服はベッドの上に適当に置いておいて。私も着替えてから帰るから。」

「はい、わかりました。」

彼女が着替えている数分の間、私は何を考えたらいいのだろうか。

あんなことがあった日だから、早く一緒に帰ってあげようと思っていたけど。実際には前から同じようなことがあって、私は知らずにピアノの練習をさせていたのか。

よい方に考えれば、それは彼女の心の支えになっていたかも

知れない。しかし悪い方に考えれば、私は彼女のことを何も考えずに、自分勝手な振る舞いをしていたと言えよう。真実がどちらなのか、今の私に知る術はない。

……なら、考えても仕方ないか。

彼女のことをまた一つ知っただけ。そして、私が彼女に対して抱えている思いが変わることはない。妹みたいな可愛い後輩。大切にしたい存在。だったら、そう接するほかないな。

ちよつとした決心ができたとき、カーテンの隙間からひよいと顔が現れ声が出た。

「着替え終わりました。先輩、どうぞ。」

「うん、わかった。」

入れ替わりにカーテンの中に入ると、ベッドの上には、綺麗に畳まれた私の制服が置いてある。畳み慣れているのだろう、整った畳み方だ。なんだか嬉しくなりブラウスを取ると、袖を通す。

——まだ、紬希の体温が残ってる。

……やめて。何を考えてるのよ。

今は振り切って、急ぎで着替えた。

「お待たせ。」

「やっぱり、先輩の制服は先輩のサイズですね。」

何食わぬ顔を作ってカーテンを開ける。すぐそこで鞆を持って待っていた紬希ちゃんが、いつもの笑顔で声をかけてくれた。いつも通りの笑顔が、苦しい。

「そりやそうだよ。それで、どうする？ ピアノの練習する？」

「どうしましょうか……。せつかく先輩が心配してくださったので、今日は帰ってもいいですか？」

「うん、いいよ。一緒に帰ろうか？」

「はいっ。」

今となつては、ピアノの練習をすると言われる方が怖かった。いつも通りでいられないのは、多分、私の方だから。

言葉少なに歩いた帰り道、彼女がきつと心配するだろうつてわかっていた。それでも、いつものような何でもないおしゃべりはうまくできなかった。

「千絵里先輩、本当に、私は大丈夫ですから。私のせいで先輩が元気をなくしてしまうのは、とても辛いです。その、無理かも知れませんが、私のことなんて気にしないでください。」

彼女との分かれ道でかけられた言葉に、私はやつとの思いで答えた。

「ごめんね、頼りない先輩で。」

頼りない先輩。そうだな。自分の気持ちにすら気づけず、袖希ちゃんに心配までさせてしまう私は、頼りない先輩だろう。

何も考えることができぬまま帰宅後自室に入ると、鞆を投げ出して、その場にうずくまった。

「ダメだよ、早く着替えなくちゃ……。」

頭の片隅でそんな声が聞こえるけど、うまく身体が動いてくれない。

さつきまで袖希が着ていた服を、私が着ている。

鼓動は高まり、落ち着いてものを考えられる精神状態ではない。それどころか逆に、してはならないことをしてしまいそうだ。大切な彼女の体温で、自らを慰めるなんて。そんなことをしたらもう、彼女の顔を見ることはできない。

どれくらい、そうしていたのだろう。

帰ってきた頃にはまだ明るかった窓の向こうも、真つ暗になっている。何とか気持ちは落ち着いてくれた。これなら自らの緊縛を解いても大丈夫だろうと思え、力任せに肩を抱いていた両腕を下ろす。

また身体の自由は利かなくて、うまく制服を脱げなかつたけれども、幸い、途中で感情に負けてしまうことはなかつた。脱いだ制服を無理にでもハンガーに掛けて、脱衣所の洗濯籠に放り込み、冷蔵庫から冷たい水をひつたくつて自室に戻り。

「私が、袖希を、好き？」

言葉にすると未だに違和感があるが、この身体の反応は疑いようもない。

他人が着た服を着たからちよつとドキドキした。その程度のものだつたらよかつたのだけど、絶対に違う。けれども好きだなんて……。

「バカだな、私。」

ベッドに横たわりながら、虚空に呟いた。

いつから好きだつたのかもわからない。きつと、今さつき好きになつたわけではないだろう。でも、全然心当たりがなくて。

どんなに考えてもきつかけを思いつかない。

結果、彼女が着ていた服に興奮して気づくなんて。まるで変態。

こんな私が紬希を好きになるのは、許されることなのだろうか。

真つ新たな彼女を汚している。自分の感情が、醜いものにしかならなかつた。

翌日は運良く祝日。

こんな状態で紬希にどんな顔をして会えばいいのかわからなない。そして会ってしまったら、彼女に何をしようかわからなかつた。

今日一日、落ち着いて考えてみようと思う。明日までとにかく、彼女と顔を合わせられる程度にはしないとならない。けれども、私一人で考えたなら、もっと悪い方に傾いてしまいう。今は、紬希のことを考えるだけで何をすべきかわからない状態。

気乗りはしなかつたが、背に腹は代えられないか。私は唯一の相談相手に、頼ってみることにした。

「いつからか紬希ちゃんの話ばかりするようになったじゃない？ あああたりから好きだったんじゃないの？」

「気づいていたら言ってくれたっていいじゃないですか。」

「あらあら、ここに文句言いに来たの？ まあ何にせよ、言ったところで千絵里は気づかないでしょう？ 『変なこと言わないでください』って一蹴したに決まってるわ。」

「それは、そうかも知れませんが……。」

私が相談を持ちかけた途端、高子さんは「あら？ やつと気づいたの」と一言で片付けた。言わせれば「端から見れば明らかだったわよ」とのことであるが、そんなあつさりと言われている私が収まらなかつたりする。

「彼女の着ていた服を着て気づいたつてのはさすがにどうかと思うけど、それで気づけたんなら正常でしょ。」

「そういう、ものですか？」

「と、私は思うけどね。触りたいとか、抱きたいとか、思うのはおかしくないんじゃないかな。だいたい恋人同士になったらすぐにべたべたするわ、セックスするわ。今時の高校生って、そんなの普通じゃないの？」

「……どうせ私は、普通じゃありませんから。」

「ほらそこ、拗ねない拗ねない。千絵里はちよつと、優しすぎて、純粹すぎるだけよ。彼女を大切にすることって気持ちには、とてもいいことだと思おうの。」

「でも、そんなの表面だけで、紬希のいないところでは、その、何と言うか、触りたいとか……。」

「そうやって彼女に直接触れないよう努力しているのは、彼女を大切にしているからでしょう？ 結果として少し歪な形になっているのかも知れないけど、気にすることないじゃない。彼女を大切にしているのが一番。だと思っわ。……どうせ私は、経験少ないんで当てになりませんけど。」

ぺろりと舌を出して笑う高子さんを見ると、少し、落着けた気がする。

「そんなことありません。やつぱり、高子さんがいてくれたよかったです。」

私もやつと、いつもの笑顔をお返してきたと思う。

「でも、どうするの？ 紬希ちゃんは普通の子でしょ？ 冷たい言い方だけど、千絵里の想いは叶わないんじゃないかしら。」

「ええ、そうだろうと思います。だからやつぱり、このまま秘めた方がいいのかなって。」

告白をするなら、紬希に嫌われる覚悟もする。それは私側の問題だから努力次第。けれども、彼女に辛い思いをさせるのは避けられない。紬希は私に告白されて、答えに窮するだろう。きつと、真剣に悩んでしまう。そしてどんな答えであれ、彼女には私を拒絶したという思いが残ってしまう。きつとそれは、彼女を苦しめ続けるんじゃないだろうか。

「それも一つの選択肢ね。私はそうしたけど、やつぱり正しかったとは言えないかなあ。」

「でも……。」

「千絵里は、紬希ちゃんに辛い思いをさせたくないって思ってるんだろうけど。告白を断ることが辛いことだとしたら、紬希ちゃんは一生恋をしてもらえないわ。」

「でも、女同士だから断ったって気持ちには、その、なんて言うか。普通とは違う……。」

「そうかも知れない。けど、あなたの想う紬希ちゃんは、そんな理由で断るような人なの？」

「それは……。」

「ごめんね、ずるい言い方で。正直、女同士も男女も私にはよくわからない。でも、千絵里のこと、応援したいのよ。」

「ありがとう、高子さん。それじゃ何の解決にもなりませんよ。」

目の前が涙で曇ってしまったても、高子さんはそこにいてくれて。笑顔で軽口を叩いてくれるんですね。

「仕方ないでしょ。この年にして経験値はゼロみたいなものなんだから。相談相手を間違えてるわ。」

そうですね。高子さんは相談相手なんかじゃなくて、いつも、一緒にいてくれる人だもん。

開口一番、紬希ちゃんは笑顔で言ってくれた。

「今まで通りで、いいですから。その、私は、全然大丈夫ですから。」

休み明けの放課後、あれこれ考えたあげくに、私はいつも通りを演じていた。

紬希ちゃんが察している私の気持ちは、本心とちよつと違うのだけだ。確かに、好きになつていなくても、今まで通り接することはできなかっただろう。

「うん、わかつた。でもね、やつぱり全部今まで通りは無理だよ。元氣なかつたら心配しちゃう。」

「それは、その、嬉しいですけど……。」

「何かあつたら、できればいいけど、相談してね。」

「ご迷惑じゃありませんか？」

「ううん、全然。一人で悩まれる方が迷惑だぞつ。」

「……わかりました、じゃあいつばい相談しちゃいます。」

「いいよ、それで。楽しみに待つてるから。」

「えー、相談することなんかいい方がいですよお。」

「あ、それはそうなんだけどさ。」

夕日と言うにはまだちよつと早い、明るい日差しが、鮮やかに彼女の笑顔を照らしている。それはあまりに綺麗な光景で、今の私には甘美な痛み。頬に触れ、口づけできたら。どうしたつて、そう思つてしまう。

このままおしゃべりを続けているとどうにかなりそうなので、能う限りいつも通りに、「視聴覚室にいるから」と彼女の側を離れた。

「……はあ、こんな状態で、何日持つのかなあ。」

後ろ手にドアを閉めて、誰もいない廊下に話しかける。もち

ろん答えなんて返つてくるわけないのだけれども、今はそんな冷たさがちよつどいい。

「恋の病とはうまくいったものだな。」

早いうちに罹つておかないと、重くてどうにかなりそう。

中学生にもなれば、みんなそれなりに恋はするし、付き合つたりする子だつていて。今考えればおままごとみたいなものかも知れないけど、私もその流行に乗つておくべきだつたか。そんなことを、今考えても仕方ないんだだけどさ。

何となくすつきりと顔を上げ、向かいの視聴覚室を見据えると、音が聞こえる。視聴覚室の扉は防音ではないため、聞き間違えようもない。ピアノの音色、先客がいるのだろうか。そうつと扉を開けると、パタリと音がやんだピアノに。

「こんにちは、千絵里先輩。」

瑠璃ちゃんが座っていた。意外な先客だな。

「こんにちは。どうしたの？」

「先輩のピアノを聴いてみたいというのもありますけど。本題は、紬希のことです。」

彼女らしく、ハッキリと嫌みなく、目的を告げてきた。一昨日の話が耳に入ったのだろう。私があんな格好で歩いたせいで、話は校内全体に広まつていた。幸い、流布されている内容は、まさに私の奇行についてなのだが。彼女はその奇行の理由まで知つているのだろう。

「紬希から、今までのことも聞きましたか？」

言葉を放つと同時に人なつこい笑顔は消え、強い眼光が宿る。

「多少は。詳しくは聞いてないけど。」

その瞳はやはり彼女らしく、曇りなく語りかけた。

「私には、紬希の手を引いてあげることができません。だから、お願いします。」

今になつてやつと、言われてから気づいたが、不思議な話だ。

紬希ちゃんと彼女は、親友と言える仲間だろうと思える。しかし紬希ちゃんは彼女に相談したことがなさそうだし、彼女は紬希ちゃんに事情を問うたことがなさそう。

そんな不思議な状態でも、私に理由を聞かせないのは、彼女の、彼女たちのまつすぐな性格のためなのだろう。だから、お願いも迷わず受けよう。

「できる限りのことは。約束する。」

「ありがとうございます。千絵里先輩が、私にとつても信じられる人でよかったです。」

ふと笑顔に戻し、彼女はピアノ椅子から降りて。

「ピアノはまた今度聴かせてください。」

「ええ、いつでもどうぞ。」

「それと。紬希はきつと、女性でも気にしないとしますよ。」  
すれ違いざま、振り向くことなく紡がれた言葉。

その意味は、やつぱり、言うまでもないか。

「いつから、気づいてたの?」

「初めて、お会いしたときには。」

楽しそうな声だけを残して、その姿は扉の向こうに消えていった。

「気づいてなかったのは本人だけって、変なの。」

独り言ともに叩きだした鍵盤は、思いの外に軽やかな音を奏で始めた。

その後の生活も意外と普通にできている。と言つても、まだ今日で二日目なだけ。

紬希ちゃんの教室の前を通るとそれとなく中をチェックしたり、ピアノを教えているときには何度となく触れそうになつたりしてしまふけど。昨日顔を合わせるまでは全然自信がなかっただけに、何とか持ちこたえていることに感心している。

「おっけー、よくできました。今日はおしまい。もう、ピアノには慣れたかな?」

「うーん、わかりません。まだ全然弾けませんから。」  
小さな手を見つめながら、彼女は悩ましげ。

あんな可愛い手と繋げたらな。気づくとそんなことばかり考えているのだけれども、それは仕方ないんだつて思うことにした。

「そっか。じゃあ、もつと練習しなくちゃね。」

「はいっ。」

鞆を取り音楽室を出て行く紬希ちゃんを見送りながら、私も一緒に帰りたいなと思つていたら。ふと思ひ出した裕子と

の約束。あ、そうだ、今日は早く帰るって言ったんだ。

仕方なくピアノの蓋を閉じて、私も音楽室を出た。

「遅いよ、千絵里。」

すぐに飛んできた声は、音楽室の目の前。まさかこんなところで待っているとは。

「ごめん。教室で待っていてくれてもよかったのに。」

「どうせ忘れてるんだろうと思って迎えに来たのよ。」

裕子つてばせつかちさんなんだから。慌てなくたつて逃げないでしよう？

以前だったらそう言つてやつたらうけど。今は黙つておこう。私は音楽室にいたい、裕子は帰りたい。お互い様だもんね。

「さ、早く帰ろ。伊吹待たせてるからさ。」

「ふうん、伊吹つて呼んでるんだ。」

「え、あ、うん、そうなんだけどさ……『根谷先輩』じゃ変じゃない？ ほら、卒業したのに。」

別に深い意味があつたわけではなく、初耳だつたから「そうなんだ」つて思つただけなんだけど。今までずっと、話の中では「根谷先輩」だつたから。いいと思うんだけどな、当人にしてみれば恥ずかしいのだろうか。

「卒業したつて先輩は先輩だけだ。」

「そ、そうだけど、千絵里だつてそう呼んでるじゃない？」

顔を真っ赤にしながらか解する裕子はなんだか新鮮。裕子つてこんな表情もするんだなあ。

「ごめんごめん、おもしろかつたから遊んでみただけ。ま、好

きに呼べばいいんじゃない？」

「うー、千絵里の意地悪う。」

「一緒に帰るつて言い出したんだから、これぐらいは覚悟してもらわないと。」

「そうだけださあ。伊吹のいる前でそんなこと言うのはやめてよお？」

「わかつた。裕子には言わない。伊吹で遊ぶことにする。」

「えー、それもダメだよ。」

それぐらいさせてもらわないとね。こつちだつて、覚悟決めて誘いに乗つたんだからさ。

昇降口を出てすぐのところ、伊吹が待っていた。

「あ、ちいちゃん、久しぶり。」

「久しぶり、伊吹。んー、付き合ひ出したらもう少しと思つたけど、逆に女の子つっぽくなつちやつた？」

「そ、そうかなあ。そんなことないと思うんだけど……。裕子はどう思う？」

「えつ、そんな、全然、今まで通りだと思つよ、うん。」

おいおい、この二人は大丈夫なのか？

一応二ヶ月付き合つていて、このぎこちなさはなんなんだか。キスの次はどうしたんだよ？

「あんたたち、ホントに付き合つてんの？」

「え、それは、ねえ？」

「一応……。」

この辺が、決定的に女の子つっぽくなつたと思つ。以前の伊吹

ならスパッと「付き合ってるよ」って答えたと思うんだけど。

「まあ、いいや。とりあえず『一応』はやめなさい。裕子、泣いちゃうよ?」

「あ、ごめん……。」

「うん、いいの。気にしないで。」

少々血の気が引いた伊吹と、うつすら赤みが差す裕子と、視線が全然合っていない。

まあ、二人は二人なりに、うまくやってるのかなって。私は一人だけ、笑顔。こつちも意外と普通にできてる? それだけじゃない。意外と楽しい、かな。

「はいはい、恋人ごっこはその辺にして、ケーキ食べに行くんですよ?」

右手に裕子の手、左手に伊吹の手をつかんで、私はまっすぐ歩き出す。この二人に任せておいたらいつまで経っても進まない。善は急げ。おいしいものは早く食べに行かなくちゃね。

「あー、引つ張らないでよちいちゃん。」

「そうよう、千絵里ったら食べることばっか。」

あのー、えーと、裕子がそれを言うか? おいしいケーキ屋があるから行こうって言ったの、裕子だよな?

「どうせ私は色気より食い気ですよ。いいもんねー。」

思いつきり笑って、私は思う。いいんだよ、それで幸せなら。繋いだ手の先、二人が小走りて追いかけてきた。

そっか、伊吹は昔のこと、話してないのか。

誰かに聞こえてしまうんじゃないかと思つて、私一人の保健室でも、心の中で呟いただけ。

当然と言えば当然かも知れない。あの二人の状態で、そんな話ほできないだろう。昨日だつて、口に入れたケーキの味、紅茶の香りすらわからなかったんだろうな。仮にも高校生なのだから、もう少し普通に付き合ってるものかと思つたけど。

「お待たせ。」

「お疲れさまです。仕事、大変そうですね。」

「まあね、たまには働かないと。」

保健室に入るなりテーブルに着いた高子さんに、ティーポットから紅茶を注ぐ。飴色の紅茶が真つ新なカップに流れ込む様は、いつ見ても綺麗。

「それで、今日はどうしたの?」

ソーサーに乗せたカップを差し出すと、お待たせしましたと言わんばかりに聞いてくる。

「別に、どうもいませんよ。」

「そっか。とりあえずは日常に戻ったのかしらね。」

「そうかも、知れませんが。」

紬希ちゃんとのピアノの練習を終えて、保健室でお茶をいただく。この生活だつて、日常と言うほど長く続いているものではないんだけど。わずか一ヶ月前、三年生になってからのことだ。

それでも長く続いているような気がして、その間には、なん

だか大変なことがいっぱいあったような気がして。だから「日常に戻ってきた」って、ぴったりの言葉だと思うな。

「千絵里がここで明るい顔をしてくれるの、久しぶりな気がする。」

「私もそんな気がします。おそらく、数えたら数日ぶりとか、その程度だと思うんですけど。」

「辛いことは長く感じるのよ。人間の心って、不便にできてるのよね。」

「そうですね。でも、思いがけなく幸せだったりして、不便なものいいかな。」

お茶菓子のクッキーをティースプーンでつつきながら、自分の言葉にこそばゆさを感じたり。

「あらあら、今日の千絵里はどうしたのかしら？」

高子さんの言葉に、今日も緩やかな優しさを感じたり。

「昨日、伊吹と裕子と、ケーキ食べに行ってきたんです。」

幸せだった瞬間を、楽しく話したりできる日常。

「ふうん。根谷さん、元気だった？」

「ええ。少し女の子っぽくなつたように見えたんですけど、私の気持ちのせいかも知れませんね。」

「千絵里の気持ち？」

「袖希ちゃんのことです。頭がいっぱいで気が薄れていましたけど、あの二人と一緒にいるところ、本当は見たくないと思つてました。」

好きな人と、友達と。一緒にいるところなんて、見たいわけ

ない。見てしまつても伊吹が好きだし、見てしまつたら裕子を恨んでしまうかも知れない。そう思つていたから。

「けれども違つたんだ？」

ティーカップを口元に運びながら、悠々と問い返す高子さん。きつとわかつてるんだらうな。

「そう、違つたんです。今でもどこかで、伊吹が好きだとは思つてます。でもあの二人が幸せそうにしているの、とても嬉しかった。」

「ちいちゃんも一つ大人になつたわけか。」

「そうですね。」

眼前のカップをずらしてにこつと笑う高子さんに、私もいつの間にか微笑み返していた。

「袖希ちゃんのことです、その、取り乱しちゃつて気づかなかつたんですけど。今までの私だったら、袖希ちゃんを好きになることもできなかつたと思うんです。」

「どういうこと？」

「袖希ちゃんを好きになつても伊吹がまだ好きだつたら、それって浮気じゃないですか。私、そんなの絶対許せません。じゃあ伊吹が好きじゃなくなつたんだって言うのも、違ふと思うんです。だって好きな人を、そんな簡単に好きじゃなくなるなんておかしいです。やつぱり許せません。」

「難しいこと言うわね。」

「そう、ですね。私も言つてよくわかりません。」

つついたらパスッと割れてしまつたクッキーの一片を口に

して。甘い感触とともに、私は言葉を綴り続ける。

「だから今までは、初恋の次があるなんて許せなかつたんじゃないかなって。でも今は、大切な人が増えることは、悪くないのかなって。そう思えるんです。それが浮気とどう違うのかって言われるとうまく答えられないんですけど、伊吹も、紬希ちゃんも、とても大切な人です。」

「……ごちそうさま。お茶、おいしかったわ。それと、私の初恋はまだ終わってないから。もう、何も言ってあげられないわ。」  
席を立った高子さんの笑みは、不敵でちよつと意地悪。

「別に、そんなつもりじゃ……。」

「あーやだやだ、妙に謙遜したところがいやらしいわね。千絵里お姉様。」

「そんなんじやありませんよお。」

私だつてまだまだ先は長いんだから、急ぐ必要なんてありませんよね。

高子さんのじゃれた声が、今日も優しく響いた。

おそらく、多分、きつと、間違いない。今回もごめんなさい。

現在初稿を上げた段階ですから努力はいたしますが、また完成度の低い状態で本になっているような気がします。時間がないうからと言いつつ訳してみたりもしますが、手を付けるのが遅いんだろうと言われればその通りです。ごめんなさい。

特に、起承「転結」の伏線がうまく張れていない感があるんですよねえ。まあ、一人称視点でのお話なので、突然でも許されるかと逃げたりしましょう。感情と言葉の調子が合っていないところは、逃げようもありませんけど。ダメダメだ、私。

気を取り直して。いつもおなじみの方も、今回初めましての方も。お読みいただき、ありがとうございます。

今回のお話は「三姉妹は未完成」の下巻です。初めましての方、ウェブサイトにて上巻をお配りしておりますので、もしよろしければ併せて読んでいただけると嬉しいですよ。ちなみに『セレクトタイプ・チョコレート』はちよつとしたシリーズものになっていますので、もし、もしよろしければ最初から読んでいただけるととても嬉しいですよ。感想をいただけたりすると涙流して喜びますので、よろしくお願いします(笑)。

実はこれ、実際に書く直前まで存在していたプロットと、終盤が違うんです。プロットでは「千絵里が気づいていなかった

悩み」の部分の前面に出して、自己嫌悪に陥るような展開だったのです。でも書くときにはなんか暗い感じにできなくて、こんなになっちゃいました。

どちらが読者受けするのかなって考えると、多分、プロットの段階にあつた展開だと思っんです。卑屈な感じで悩み抜いて、最後、やっぱり暗いか一転明るいかのエンディングを持つてくる。女の子向けだと王道なのかな。でもそれをあえて避けた僕の気の弱さは、どうだったのだろう(笑)。どっちがよかった、いやこうした方がいい、意見をお待ちしております。

以前にも書きましたが、千絵里は私と似た考えの子。故に「千絵里が気づいていなかった悩み」は私が気づいていない悩みだったりもするのかな、と思ったりもする今日この頃。突然ネタとして思いつくってことは、そーゆー経験が積まれていると考えるのが妥当か。確かに、その気はあるかも知れませんが……。

さて、次はどうしようかなあ。紬希を千絵里にやる気はないけど、瑠璃がいるからいつか。なんていい加減な気持ちだと瑠璃にも振られそうで怖いので、やっぱり紬希もあげない(違)。シリーズ二作目で張った伏線を放置プレイにしているものもあるし、千絵里と紬希との今後も書いてみたいし、早いうちに、続編を出すかも知れません。続編まであまり間をおくと、設定に歪みが生じがちなので……。

それではまた、いつかどこかで。近いうちに？ 最近は思いがけずにハイペースで、先月も一本、個人のウェブサイトでリリースしたりしましたが……。これからは衣装制作も入りますからねえ。おそらくは夏コミで、お会いしましょう。

二〇〇七年五月、連休中、お外に出たくても出られない私よ  
り。

セレクトティブ・チョコレート 三姉妹は未完成(下)

Fukapon

2007年5月5日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷/製本 project KAIGO 東川口分室

Copyright (C) 2007 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>